

第十五章

女性嫌悪

——男たちの戸惑いと抗い——

田中 孝信



トマス・テオドール・ハイネ『処刑』（1892年）

第一節 流動化するジェンダーの境界

ドイツの画家にして諷刺漫画家トマス・テオドル・ハイネは、一八九二年に『処刑』という題の絵を製作した（本章の口絵参照）。それは、猛女的な女性支配者との男性の悪夢のような遭遇を描いたものであり、ブラム・ダイクストラは次のような説明を加えている。

男は好色の象徴である山羊に導かれて、ぐらぐらする狭い連絡通路を、女陰のような肉欲の城へと歩いて行く。男の首の回りには薔薇でできた絞首索のような手綱がついており、それを剣を肩に担いだ女が握っている。彼女は、その運命の門をくぐるや、必ずや男に襲いかかり、首を切り落とし、その去勢された残骸を、真っ赤な唇をした肉食の黒い、白鳥たちに投げ与える。一様で未分化な女性性という水面に無数に群がったこの白鳥たちは、女性の犠牲となった男たちの使い果たされた肉体を食い尽くす¹⁾。

そこに見られるのは、当時流行した進化論や優生学への声高な支持と賞賛のもと、男たちが抱いた、文明の進歩を担う男性を退化させる、処刑者としての役割を男性から強奪した猛女的な男勝りの女への、マゾヒスティックなまでの恐怖なのである。

男の精液を渴望する女たちは、男のエネルギーが最も行き渡る、知性の象徴である頭を萎縮させるどころか、切り落としてしまう。ユディットやサロメの物語では十分とは言えないとばかりに、世紀転換期の芸術家たちは、剣を振るう女性たちを様々に表現する。その根本にあるのは、男性の支配欲に対して従順な犠牲者の役割を演じ続けるのを拒む猛女としてのフェミニストを前にして、安心して威張ることのできなくなった男たちの不安である。それは、女性嫌悪を伴った反女性的態度となつて、世紀転換期のヨーロッパやアメリカに広がる。

事実、イギリス社会においても、十九世紀も末になると、それまで比較的確固としていた「強者」と「弱者」の関係に大きな揺らぎが生じる。特に、社会の実権を握る男たちにとつて最も身近な脅威となつたのが、ジェンダーにおける危機だった。フェミニストたちが、家長制イデオロギーに基づいた役割分担や二重基準に異議を唱え出すと、両性間の関係は緊張する。「女性問題」は大きな社会的関心事となり、女権運動に拍車がかかる。初めて国会に提出されてから二十六年後の一八八二年には、既婚女性財産法が制定され、結婚に伴う妻の独自の財産権が保障される。一八八二年と九三年の婚姻訴訟法によって、妻には夫と対等の法的地位が与えられる。また、一八八六年の妻扶養法は、労働者階級の妻が、夫によつて一方的に遺棄され赤貧状態に陥るのを防いだ。同様に重要なことに、この時期、中産階級の女性たちは避妊の方法を知りようになり、セクシユ

アリテイや結婚の義務に対する彼女たちの態度に大きな変化が見られた。また、教育面でも女性に門戸が開放された。一八七九年、ロンドン大学は女性にあらゆる種類の学位を授与することを決定し、一八八六年にはオックスフォードとケンブリッジの両大学が、女性が講義に出席し学位を取得することを許可した。フェミニストたちの成果のうちで最も重要なもの一つは、伝染病法の撤廃であろう。「リスペクタブル」な顧客が性病にかかるのを防ぐために、売春婦に検査を強制するというこの法律は、国会の議論を経ずに、一八六四年、六六年、六九年に改正強化されていったが、ジョゼフ・バトラーを中心とする廃止論者たちは、好戦的なまでの運動を展開し、一八八六年に法律を廃止に追い込む。政治と権力という男性世界においても、女性はいづれの主張を通すことができるということを示明したのである。

世紀末のこうした動きは、中産階級の間にジェンターの再定義という問題を引き起こす。それは何も女性だけが意識したものではない。男性もまた、女性と性の優位を争う一方、**「男らしさ」**とは何かという疑問を抱く。家父長制社会のなかで男性に課せられてきた役割を維持するのに自信が持てなくなっている。 **「力」と「理性」**を誇示する仮面をつけ、強い感情を **「女らしさ」** につながるものとして抑圧することを社会から求められると、男性のなかには、内面に混乱を来す者も出てくる。不動のジェンターの枠組みなど構築できないのではな

いかという思いに、多くの男性が狼狽するのである。

しかし、ジェンターの役割分担を遵守しようとする男性側の動きが、少なくとも表面上は際立っていたのも事実である。女性の進出を前に、男たちは、ホモセクシュアルな欲望と脆い境界線で隔てられたホモソーシャルな絆による結びつきを再確認する。そして、ヴィクトリア朝の **「男らしさ」** という脆弱な構築物にすがりつき、あからさまに反動の姿勢を示すのである。彼らは、**「男女間の習慣が一致する方向に進むにつれて、文明の本質的な核である洗練さと繊細さはなくなつてゆく」**と激しく非難する **「ミセス・リン・リントンたち保守的な女性たちを味方につけて、フェミニスト批判の論陣を張る。家父長制中産階級の言説において、フェミニストの言動は、男性を墮落させる売春婦と結びつけられることになる。早くも六〇年代から、**「不健全な成育」**を遂げ**「病的な渴望」**を抱くフェミニストは、接触伝染、腐敗、その他、崩壊や境界侵犯を示すものを連想させる、社会悪だった。それはまさに、国家と同一視される男性の健康と安全を冒す、利己的かつ攻撃的な**「道徳の壊乱者」**、**「病気の伝達者かつ体現者」**としての売春婦そのものなのである。**

男性は、自らをあくまで旧来のイデオロギーに則って提示する。それに従えば、男性には克己や寡黙さが備わっていることになる。これらの特徴は、ヴィクトリア朝の中産階級男性が好んで着た黒服や、絵画において、裸で傷つきやすい女性像と対



図① ジョン・エヴァラット・ミレー『遍歴の騎士』（1870年）

比して描かれた、鎧で身を固めた騎士像に象徴的に示されていた(図①)。こうした忍耐力のある男性が、公領域で積極的に行動し、私領域にとどまる受動的な女性を保護し育まねばならないのである。もちろん、自制するということは、内に逸脱した要素を含んでいるからに他ならない。ラスキンが「王妃の庭園について」で言うところの「冒険に、戦争に、征服に向いている」⁽⁵⁾男性のエネルギーからは、洗練された文化よりは野蛮な自然と結びついた男性像が浮かび上がる。男性の領域とは、平安な家庭の外に位置する制御の効かないエネルギーが渦巻く空間なのである。ミセス・ブラウンは、「男性の適切な領域」という論のなかで、「男性は、自然と自分自身とを相手に戦って

いる⁽⁶⁾」と述べているが、そこからは、絶え間のない行動によって律し制御しなければならぬ、男性内部の爆発力の存在が窺える。男性は、外界と「戦い」、それを「服従させる」ことで、内面の混沌を支配できるのだ。そして、この自己抑制に成功することこそが、彼らが求めたものだった。言動を律することは強さの表われであり、内面の混沌が大きければ大きいほど、その克服は価値あるものとなり、男らしさは高まる。(家庭の天使)像を捨て去り権利を主張する女性たちは、定められた領域から出て男性の優位を脅かすのみか、男性のこうした自己陶醉症的なまでの克己心を掻き乱す魔性の存在となる。男性の優位に不安を覚えながらも、いや、それゆえにこそ、ヴィクトリア朝の男たちは、家父長制イデオロギーに頑ままでに囚われるのである。

では、世紀末の男性の一人として、ギッシングは、女性の進出に対してどのような態度を取ったのだろうか。彼は、オーエンズ・カレッジでの事件以降、自分自身を社会のアウトサイダーだと見なしていた。それゆえ、周縁に押しやられた女性たちの苦境に共感を覚えていたのは確かだ。「スクラップブック」に記された「女性の幸福が家庭の利己的な男性の犠牲になるというごくありふれた現象⁽⁷⁾」という言葉からは、女性に対する家父長制社会の抑圧に関する彼の基本姿勢が読み取れる。エドゥアルト・ベルツに宛てた手紙のなかでは、「女性が男性と同じ程度⁽⁸⁾の知的な訓練を受けない限り社会の平安は得られないと、

私は確信している。この世の不幸の半分以上が、女性の無知と幼稚さに因るのである」(Letters 5: 113)と述べて、フェミニストの主張が、結局は男性のためにもなるという信念を披瀝する。

だが一方で、最初の妻ネルや二番目の妻イーデイスとの結婚生活の破綻といった実生活上の扇情的なエピソードを反映して、作品中の、特にサブ・プロットには、多くの不愉快な女性が登場する。デイヴィッド・グリルスは、そこに見られるギッシングの女嫌いについて、「彼の小説に登場する女性が不道德だというだけではない。虚栄心、貪欲さ、不合理、嫉妬心、暴力、心気症、意地悪さ、皮肉癖、因習性——挙げ出したら切りがなく、それらについて論じ合うのはほとんど不可能なほどだ」(Gylis 147)と述べる。ギッシング自身、女性の描き方ゆえに、世間は自分のことを「女嫌いの(woman-hater)」(Letters 7: 147)と呼んでいると、ガブリエル・フルリに伝えている。

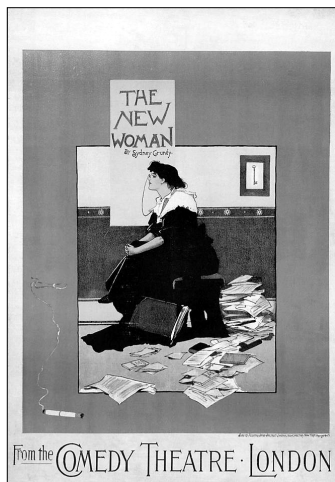
はたしてギッシングは、女性の権利拡張に賛同しているのか、それとも反対しているのか。彼の曖昧さは、「女性の解放に関心を持つ、女性崇拜的な、女嫌いの」(Gylis 141)と云った評価をもたらささえする。そうした曖昧な態度の根底には、一つには、伝記的要素が挙げられる。「女性についての極端にロマンティックな理想」と、貧しさゆえのコンプレックスから来る「強烈な自己破壊的衝動」、この両者の葛藤が原因となつて、彼は常に情緒的に不安定な状態に置かれていたのである。だが同

時に、彼の態度に、世紀末の男性の、「性のアナキー」(Letters 5: 113)と呼ばれる新しい事態に直面した狼狽が映し出されているのは間違いない。

では、それは彼の小説のなかではどのように表現されているのだろうか。本章では、男性側の反応を、女性問題を共感の眼差してもって描いたとされる「余計者の女たち」(一八九三年)の主人公エヴァラード・バーフットと、それとは対照的に「ギッシングの小説中、彼の女嫌いが最もよく表わされている」(Halperin 240)とされる『渦』(一八九七年)の主人公ハーヴェイ・ロルフを中心に具体的に探つてゆく。そうすることで、両極に位置すると考えられている二作品の共通項を抉り出し、九〇年代における性の力学のなかで、ギッシングの置かれた立場を明らかにしたい。

第二節 夢追い人エヴァラード

主人公のエヴァラードは、メアリ・バーフットやローダ・ナンといった知的で経済的に独立した女性「革命家」たちの世界を冒険する(図②)。友人たちが愚かな妻ゆえに悲惨な結婚生活を送るのを目の当たりにしてきた彼が、理想の女性像に求めるのは、無垢な少女つぼさや美しさではなく、成熟と知性である。「精神の伴わない美など減じるがいい。……気紛れの恋ならば、女奴隷に相手をさせればいい。しかし結婚生活とは、男



図② アルフレッド・モロー『新しい女』（1894年）、劇場用ポスター。1894年9月に開演したシドニー・グランディの劇は、知的女性の「女らしくない」側面を皮肉った。

と女の間係を持続させることであり、それには知性こそが第一の要件である」（第十七章）と彼は思う。

エヴァラードのローダに対する求愛は、最初、観察者としての立場を取る。彼は、興味深いが、世間的には理想とは言えないタイプの彼女を、ふざけた恩着せがましい態度で精査する。初めて会ったとき彼女の姿を観察した彼は、後には、性の鑑定家と言った様相を呈するほどに、彼女の顔の造作を分析する。彼は彼女への関心を「純粹に知的なもの」（第十章）であると自分自身に言い聞かせる。知的な距離こそが、彼が理想の女性像を自由に思い巡らすのには必要だったのである。

しかし、エヴァラードの感情面での独立は、彼のローダへの態度が、本当の愛へと変化するにつれて侵されることになる。理性に感性を従属させるのを旨としてきた彼は、海辺の町シー

スケイルでの彼女との「完璧な一日」に、ロマンティックな傾向を強く示す。ただ、ここで注意しておかねばならないのは、二人が互いに情熱を露わにしながらも、あくまで相手と妥協することなく、主張を押し通そうとすることだ。ゲームとして始まったものは、今や権力闘争となる。結婚を束縛として軽蔑していた〈新しい女〉は、男の誠実さを確保するために結婚を求める。ローダに「自由結婚」を提案し、彼女が彼のために社会に背いてまでもそれを受け入れてからなら、正式の結婚をしてもよいと考えていた〈新しい男〉の方は、最終的に彼女の要求におとなしく同意し、敗北ゆえの屈辱と憤りを覚える。彼女もまた、自らの信念を曲げたゆえに、勝利感を味わうことはない。

こうした権力闘争が生じる根底には、男女の平等を唱える、エヴァラードのような〈新しい男〉の限界がある。彼の言葉には、以前から、男性の権威を当然視し、ローダを力で抑え込むのに喜びを見出す姿勢が窺えた。彼は彼女に語る。

恋は野蠻人を生き返らせる。そうでなければ、恋など面白くもない。この一点だけに限っても、男というものはどんなに文明化されようと、愛する女性に自分と等しい人になつてくれとは望まないと思う。掠奪結婚は決してなくならない。……僕には君より力がある、より激しい情熱がある、だから僕はそれを利用するんです——君の魅力の一つである、その女らしい抵抗を

征服するために。

(第十七章)

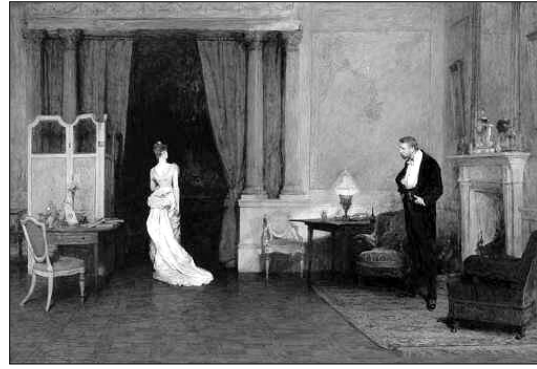
そうした力への信仰がある以上、「理想がかなえられた……完璧な瞬間」(第二十五章)が真の誠実さを欠いたものであることは否定できない。シースケイルからロンドンへの帰路エヴァラードは、彼女が苦しみ、最終的に彼の前にひれ伏す場面をサデイステイックに思い描く。「彼女は彼の前で涙を流し、嫉妬と恐怖で心はちぎりに乱れ打ちのめされたと説明するに違いない。……その時の来るのを思つて、彼はほくそ笑んだ」(第二十六章)。女性の知性を希求する彼の進歩性は、結局は、堅固で慣習的な家父長制イデオロギーの範疇を超えるものではない。

だがエヴァラードは自らを、〈新しい男〉として正当化する。男の権威に服従しないがゆえにローダに失望したにもかかわらず、彼は、彼女を偽りの〈新しい女〉だと見なす。そして、「俺の理想は発見できなかった——しかし、昨今、それは必ず実在していると思ひ」、求め続けようとする。皮肉なことに、結果として、女権運動に改めて身を投じる覚悟をするローダの方が、エヴァラードより社会的反抗者であることが判明する。なぜなら彼は、裕福な家庭の娘で、作品中、一度も姿を見せない名前だけの空虚な存在でしかないアグネス・プリセンデンと結婚することで、「社会の許可」(第二十六章)を得るからである。

エヴァラードのアグネスとの結婚には、ギッシングの、ラス

キンのな〈家庭の天使〉像への曖昧な態度が反映されている。確かにエヴァラードは平安を得るが、それは彼のロマンティズムの放棄であり、そうして得られた空間は、沈滞の雰囲気醸し出す。作品中、唯一幸せな結婚生活を送るミクルスウェイト夫妻の描写はその沈滞を如実に表わしている。二人の結婚が十七年間の婚約期間を経てようやく実現したものであり、それを描く作者の筆は、二人の愛情を賛美するというよりはむしろ、哀切感を交えつつ皮肉つているように思える。そして何よりも男性にとつて恐ろしい、去勢への潜在的危険すら読み取れる。マーサ・ヒンバーはミクルスウェイトの結婚生活を幸せなものとなす批評家の判断に、「夫を完全に支配し、彼を椅子に背筋を伸ばして座り静かに笑う居間の住人に作り変え、彼がもう本を書く気持ちさえなくしてしまうほどに、彼の活力を実に効果的に押さえ込む女性は、理想の結婚における心優しい連れ合といふよりは、愚かな結婚生活の暴君のように思える」と異議を唱える。

エヴァラードとローダとの関係を破綻させた、信頼の欠如、嫉妬心、男性の優位願望は、そのままエドモンド・ウイドソンとモニカ夫妻の悲劇の原因でもある。特に対人恐怖症とも言えるほどに、二十歳以上も年の離れた若い妻との二人だけの生活に執着し、そこに旧弊な家父長制イデオロギーを適用しようとするエドモンドの、妻の反抗に直面したときの態度は、家父長の権威の失墜を歴然と物語る(図③)。エヴァラードが自己欺



図③ ウィリアム・オーチャードソン『最初の陰り』(1887年)
リュートに生じたるは、まことにわずかの亀裂なれどやがて楽の音を止ましむ。

瞞とアグネスとの結婚によって何とか保持した権威の虚構性が、エドモンドを通して暴かれるのである。ウイドソン夫妻の関係が描かれた部分を、『サタデー・レビュー』誌(一八九三年四月二十九日)に掲載された初期の書評は高く評価しているが、我々は、モニカが結婚前、売り子という、十九世紀中頃に都市化と工業化によって起こった小売革命の結果として生じた職に就いていた点に注意を払うべきだ。「貴婦人でも売春婦でもない、第三次産業に従事する」⁽¹⁰⁾、階級的色分けの困難な売り子は、

家庭に閉じ込められることなく、都市の公的空間に繰り出す。中産階級の定めた伝統的なジェンダーの役割区分が侵されるのである。そして彼女たちは、街を彷徨する。そのことは彼女たちを売春婦と結びつける。実際、作品中には街娼まがいの売り子や、ミス・イードのような売り子から娼婦に転落した女性が描かれる。売り子たちは、性的にも社会的にも破壊力を持っており、明確な脅威として存在するのである。

モニカもまた、田舎に閉じ込められるのを嫌い、都市の自由と興奮を求めて上京する。「ロンドンを彷徨する自由」(第四章)を持つ彼女は、女性遊歩者^{フラウメーネ}と言える。結婚前からエドモンドは彼女の身体上の自由を偏執狂的なまでに制限しようと試みる。彼のそうした態度の一部には、公衆の面前に姿を晒す女性は売春婦と見なされるかもしれないという恐怖心がある。だが、結婚前はもちろん、結婚後も彼は彼女を閉じ込めておくことはできない。モニカは、ローダやメアリの感化によって、男性による束縛をますます意識するようになる。夫は妻を監視するが、彼女はそれをかわし都市を彷徨する。エドモンドはついに私立探偵を雇わざるを得なくなる。年下の青年ビーヴィスとの危険な情事が彼の知るところとなったとき、彼は暴力によって威嚇するが、それによっても、彼女を家庭空間に幽閉することはできない。彼女に比べれば、〈新しい女〉であるローダやメアリの方が、作品上では、男性の定めた結婚制度や男性の活躍する公領域に挑戦することが少ない。確かにモニカは最後には、伝

統的な解決法に則って、不倫未遂の罪を死によって報いることになるが、彼女のような都市の新しい現象にギツキングが当惑しつつ、魅せられているのは間違いない。

一瞬、エドモンドは男女の平等という考えに心動かされる。「夫と妻は平等なのだ」という素晴らしい考え、遠い未来には世界を再創造するであろう福音が、一瞬彼の想像力を強く打ち、彼本来のレベル以上に彼を高めたのである」(第十六章)。だが、家父長の権威に執着する以上、彼にはモニカは理解できない。ラスキンのな家庭像を理想とする彼は、彼女にとつては息の詰まる悪夢のような空間しか作り出せない。彼女がそれを逃れ、生き生きと都市空間を飛び回るのに対して、彼は一人家に閉じこもり彼女の帰りを待たねばならない。男女の担う領域が逆転してしまうのである。エドモンドには、この状況をどのようにして打開したらいいのか分からない。こうしたエドモンド像にはギツキングの曖昧な態度が窺える。エドモンドのあらゆる言動が残酷で旧弊なものとして非難される一方で、彼は我々の同情を喚起する犠牲者でもあるのだ。彼の孤独、女性経験のなさ、初めて恋に落ちたときの幸福感と期待、そして、あらゆるものを失ったときの無力さ、嫉妬心、絶望感ゆえに、我々は彼の言動を非難しつつも、彼という人間を憐れに思うのである。女性のみならず、男性もまたエトースの犠牲者なのである。エドモンドに見られた男の弱さは、モニカに駆け落ちを迫られたときのビーヴィスの帯びる女々しさとなって表現されたとき、そも

も男性性と女性性を区分する境界自体が果たして存在するのかという疑問を提示しさえする。事の重大性に「ぶるぶる震え、幼い少女のように顔を赤らめる」彼には、「腰の据わった悪党根性はなかつたし、まして、こんなときにこそ男を支えるはずのもう一つの素質、すなわち道徳をも敵に回すほどのヒロイズムもな」(第二十二章) かつた。

第三節 心を閉ざす人ハーヴェイ

ハーヴェイとアルマ夫妻について大方の批評家は、アルマを厳しく評価するのに対して、ハーヴェイに対しては同情的である。例えば、パトリシア・スタップズは彼を「無能なじゃじゃ馬に長きにわたって苦しめられた夫」¹⁾として憐れんでいる。しかし、二人の関係を詳細に検討すると、そうした一方的な判断に疑念を生じさせる曖昧さが浮き彫りにされる。

ハーヴェイとアルマの結婚を失敗に導いた原因の一つは、彼のアルマの行動に対する無関心である。彼は求婚に際して、「拘束」ではなく「自由」を分かち合うことを約束し、彼女が職業として音楽活動することを認める。だが、この一見新たな夫婦関係の模索と思えた行動の背後には、自分の世界を女性から守るための無関心さが読み取れるのである。ハーヴェイは、アルマをプロのヴァイオリン奏者へと駆り立てた動機が、父の詐欺行為によって被った汚名を晴らし社会に再度認めてもらい



図④ ジェイムズ・ティーソー『静粛に——コンサート』(1875年頃)

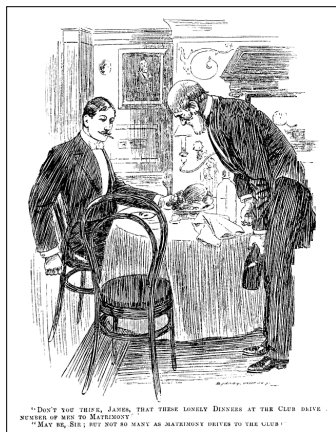
プロの名演奏家たちは、個人のパーティーや公のコンサートで引っぱりだこだった。しかし、若い淑女たちが、習得した音楽的技量を使って、ひとたびお金を稼ごうとした場合には、その技量は再評価の目に晒された。

たいという気持ちだということが分からない(図④)。女性を「非審美的種族」と呼ぶショーペンハウアーの影響を受けたギッティングが、アルマ像を通して、専門的に芸術に従事する女性を批判していると考えられることはできるが、彼女のヒステリー症の原因がハーヴェイにもあることは否めない。激情を押さえ、「理性的な男」(第一部第三章)としての姿勢を意識的に示すのに汲々とする彼には、彼女の苦悩は理解できないし、理解する

気もない。

ハーヴェイは、シビル・カーナビイ、ミセス・マスケル、ミセス・ストレンジウェイズといった蛇のようにしたたかで強い女性たちから成る外界にひたすら背を向けるばかりだ。若いアルマが、たとえ最終的には大望が社会的制約ゆえに打ち砕かれるにしても、人生の苦難に立ち向かってゆこうとする熱情を備えているのに対して、中年男のハーヴェイはひたすらそれを抑制し、怠惰で、優柔不断、そして「人生の盛りは終わったという気持ち」(第三部第二章)に自ら進んで陥っている。「渦」に引き込まれた彼が、ロンドンで唯一安心感を覚える空間は、女性と切り離された男だけのクラブであり、まるでそこで彼は男性としての性の優越を回復できるかのようである(図⑤)。「落ち着かないし、身の置き所もないので、その当然の結果として、彼は心ならずも昔の気楽な習慣に憩いを求めるようになった。彼は再びクラブやレストランで、昔の楽しい仲間——善良で、無頓着で、陽気で、時には金のない連中と会った」(第二部第十章)。

しかし、ハーヴェイの見せかけの(新しい男)像は、アルマの反対にもかかわらず、ガナーズベリーへの引越しを強行しようとしたときを機に崩壊する。クリステイーナ・シャーホルムは、この段階に至るまでのハーヴェイの言動の不一致を取り上げ、彼を「羊の皮を被った狼」(Spökind 120)だと弾劾する。だが我々は、独立心旺盛な妻を前にした彼の困惑に目を向ける



図⑤ 「クラブと結婚」『パンチ』(1898年10月8日号)

「クラブで一人ぼっちで食事をしてると、結婚をしたくなる男が多いだろうね」「かもしれません。でも、結婚してからクラブへ来て、一人で食事をしたくなる殿方の方がずっと多いのでございますよ」

べきである。「因襲にとらわれない人々」(一八九〇年)の公然たる暴君であるルーベン・エルガーや「女王即位五十年祭の年に」(一八九四年)のライオネル・タラントより悩みは深い。それを証明するかのように、ハーヴェイは以前から、プロのヴァイオリン奏者になろうと果敢に人生に挑戦するアルマに、表面上は無関心さを示しながらも、無意識のうちに嫉妬していた。演奏会が失敗することを願っていたといっても過言ではない。そうすれば、自分が頼りにされ、夫としての権威を妻に認識させることができるかと期待していたのである。その潜在的な欲求が表面化するのである。確かに彼もエドモンド・ウイドソンのように、夫婦関係の悪化の原因が自分にあると自責の念に駆ら

れはする。「自分こそが結婚の極意をつかんでいると見なして、結局、いつもどおり、まったく思慮分別を欠いて振舞っていた」(第三部第一章)と反省する。しかし、ハーヴェイは次第に旧来の家父長的権威を振りかざすようになる。彼女が音楽を職業とすることに初めて面と向かって反対する。アルマに求められるのは、立派な家庭を築くことだけなのである。かつて彼は友人のヒュー・カーナビイに「妻が出たり入ったりするのを夫が当然のごとく監視する時代はもう終わったんだ。そんなことでもしようものなら、物笑いになるだけだよ。新世界なのさ、君。僕たちはそのなかで生きているんだから、せいぜいうまくやらなくてはならない」(第二部第七章)と語っていた。この一見、ハーヴェイの進歩性や楽天主義を示す発言の背後には、女性の進出に対する不安感や時代の変化への不信感が隠されていたことが暴露されるのである。

ハーヴェイが「善良で思考力のある男の多くの例に漏れず、同性の間ではわけなく意識できる対等な関係を、女性である妻には求めようとしな」(第三部第四章)い限り、夫婦の距離は縮まらない。問題が生じてそれを率直に話し合う労苦を取ろうとはしない。母と娘の強いつながりを反映するかのよう^⑧に、息子ヒューイには決して見せたことのない愛情を注いだ赤ん坊が死んだとき、妻のひどい悲しみ様に、彼は、これでよかつたのだと一人納得して、「冷淡だと思われるのを恐れるあまり」(第三部第六章)、彼女を慰めることができない。サイラス・レッ

ドグレイヴのパンガローに二人きりでいたことが明るみに出たとき、彼女は自らの貞節を必死に訴えるが、ハーヴェイは「重大なことが起きたわけではない、とつとめて考えようとする」（第三部第十二章）。ただ、アネット・フェデリコのように、この場面から「そうした良識的な反応から、ロルフが女性の主体性を完全に否定していることは明らかである」（Federico 127）と結論づけるのは、あまりに女性からの一方的な見方であろう。ギッシングは、妻を信じたくとも心のどこかに疑念を持ち続けるを得ない男の苦悶に対して、『余計者の女たち』のエドマンドに対してと同様、同情の念を抱いているのは間違いない。いずれにせよ、アルマの服従を分別ある行動と解釈する（Clyde 158）のは誤りであり、むしろ、それは、浄罪の気持ちを含めて自己を押し殺そうとする決意の表われなのである。夫が都会の喧騒から逃れたいという思いを募らせるにつれて、逆に彼女は、「渦巻きの中までめまいを覚えながら我を忘れて生きる喜びを激しく求める」ようになる。『余計者の女たち』の場合と同じく、都市の公的空間は今や女性のためにあるかのようだ。それにもかかわらず、アルマは夫の意思以外を捨てようとする。不眠症に悩まされ睡眠薬を頻繁に服用するのも、一つには、彼女の性向と合わない行動を自らに課した結果だと理解できる。我々は、夫に聞こえないようにアルマがつく「ため息」（第三部第九章）を聞き逃してはならない。そうした妻の内面の葛藤に目を向けようとせず、「自分こそが結婚の極意をつ

かんでいる」と思い込もうとするハーヴェイには、「アルマと長く暮らせば暮らすほど、彼女の気持ちが見えなくなり、彼女の動機が理解できなくなる」という不安に満ちた反応しか示すことはできない。それでいて、「彼女と再び議論を始める気はなかった。自分の主義をあくまで貫く他はない。さもないと自尊心までなくしてしまえうだ」（第三部第六章）としか考えられない。そうした態度は、自らの葛藤からも目を逸らすことを意味する。

最終的にアルマは死に、ギッシングはハーヴェイに、男性の願望を充足したような、家父長によって統御された牧歌的風景をもたらず。故郷の旧友バジル・モートンと、キプリングの『兵舎のバラッド』（一八九二年）について哲学的会話を交わしたハーヴェイは、七歳のヒューイと手をつなぎ、平安に、かつ男らしく、夕日のなか家路につくのである。しかし、これを単純に、H・G・ウェルズのように、男性優越主義の表われと取ってはいけない。『兵舎のバラッド』を巡るハーヴェイのジンゴイズムは、世の中に対して彼が覚えている絶望感から身を守る盾なのであり、皮肉はそのための武器なのである。ギッシング自身「彼の言葉はどこを取っても、人生の現実には嫌悪感で彼の胸を一杯にするだけであるという、彼の絶望的なまでの認識を述べているだけなのです」（Lattin 6: 320）とウェルズに注意を促している。したがって、息子を通してのハーヴェイの子供時代という保護された世界への回帰は、彼の周囲からの孤立を

鮮明にするだけと言えよう。それを反映して、「迷ったり疑ったりしていること」(第三部第十三章)に直面するのを避け続けてきた男に未来を託される少年は、外界に立ち向かうには心身ともにあまりにひ弱だ。

こうしたハーヴェイをギッシングは決して否定しているわけではない。曖昧な描写のなかにも、ギッシングが主人公に対して暗黙のうちに同情心を抱いているのは明らかだ。なぜなら、「思考対象のどれをとつても取るべき態度が決まらない男」(第三部第十三章)ハーヴェイには、性的関係が複雑化するなか、ほとんど全ての男性が意識する困惑と疲労感が体現されているからである。父権制度を批判しつつ、フェミニズムの動きには不安の眼差しを向け、女性の劣等性、従属性、性的無垢といった神話を捨て切れないでいる、世紀末の進歩的な男たちが孕む矛盾、この矛盾の根底には、新しい状況に置かれた彼らの、存在への不安が横たわっているのである。「ヘンリー・ライクロフトの私記」(一九〇三年)のなかでライクロフトは次のように述べる。

さて、しかし、琴線の触れ合うような理解をどんな場合にも期待できる人間が、はたして一人でもこの世にいるだろうか。いや、およそのところでいい、鑑賞の点で私とほぼ意見の一致する人がいるだろうか。理解力のこのような一致は実に稀有なことだと思ふ。全生涯を通じて我々はそれに憧れている。悪霊に

取りつかれるように、その欲求に取りつかれて、我々は人生の荒野にさ迷い出る。だが結局は、泥沼に落ちることが多いのだ。そして最後には、それまで見てきたものが錯覚だったことを悟るのだ。全ての人は定められている——「汝、一人で生きてゆくべし」と。
(「春」第二十章)

この感情は一つには、追放者としてのギッシング自身の思いである。同時に男性にとつて不快なまでに女性が進出する外界に対して、男性自身が背を向けようとする衝動の表われでもあるのだ。

第四節 ギッシングの脆き虚勢

ギッシングの描く男性主人公の女性主人公に対する態度は、複雑さを帯びる。ヴィクトリア朝中期の小説に登場する男性主人公、例えばデイケンズの『ドンビー父子』(一八四六―四八年)のドンビーが、内面の葛藤や弱さを抱えながらも、最終的に家長の権威を何とか維持していたのに比べると、遥かにその拠って立つ基盤は不安定化する。エヴァラードが結婚相手の女性に知性を求めるとき、そこからは彼の都会性や進歩性が窺えるが、その裏には、女性の自立に対する根源的な恐怖から来る保守性が隠されている。ハーヴェイもまた、「(新しい男)」としての振舞いの背後には、女性への恐怖心ゆえの逃避願望が隠され

ている。彼らは、いかに進歩的男性を気取ろうとも、家父長制のイデオロギーに則って自分たちの権威や道徳的・知的優越意識から抜け出せない。彼らが他人に対して隠しているものは、同様に自分自身からも隠されているのである。

十九世紀末の変容するジェンダー観の渦のなか、男女のアイデンティティは従来見られなかつたほどに大きく揺さぶられる。モニカのような、結婚によって経済的安定を確保しようとする旧来型の女性が、夫の束縛からの解放を、イブセンの『人形の家』(二八七九年)のノラのように志向する一方で、ローダのような〈新しい女〉が、結婚についていまだ因襲的側面を捨て切れない。このような二面性は男性にも共通するものである。流動化する世界にあってエヴァラードやハーヴェイは、現実の変化に気づき、それに追いつこうとしながらも、安心できる指針を求めて、単純で制御可能な役割を身につけようとす。それは彼らから個性を消し去り、画一化してしまう。いくら自らの男性性を守る方便であるにせよ、結果として、真の自己、すなわち、女性の一挙一動に動揺することなく、しかも男性としての気取りからも解放された、自由な自己の実現に彼らに向かうことはない。自己中心的でありつつ脆弱で傷つきやすい彼らは、憤怒の念に打ち震えながら自己主張するか、それとは逆に、敗北主義的な自己憐憫の情に駆られるだけだ。たとえ、最後まで表面上は無傷のままであろうとも、自己の本質的な部分が腐敗する危険性は常につきまとうのである。

エヴァラードやハーヴェイに、世紀末の男性としてのギッシングの葛藤が反映されているのは間違いない。全般的に見て、ギッシングは、民衆教育、労働者の貧困、物質主義といった多くの公的問題に関して、奇妙に相反する態度を示していた。小説には、後期ヴィクトリア朝の様々な問題が取り上げられているにもかかわらず、彼が時代の動きに熱を込めて深く係わることはない。それは、作品を覆うある種の無気力さや、多くの男性主人公を特徴づける物憂さや空しさとして繰り返し描かれる。時代に対する彼独自の深遠な考えといったものも見当たらない。問題の解決を求めて声高に叫ぶというよりは、疲労困憊した様子を垣間見させると言った方が適切だろう。モーリー・ロバートは、ギッシングに関してウエルズがヘンリー・ヒックに述べた「そうだなあ、あの男は道徳的に臆病だ。ある程度までは主張するんだが、そのすぐ後で逃げ出してしまふんだ」という意見を引用している。ギッシングの生きた著しい変化の時代を特徴づける不安と懐疑を考慮すれば、この発言は不当に厳しいものに思える。ギッシングもまた時代の申し子であり、確固たる信念を持つこともできず、自信のない手探り状態で人生を歩んで行かねばならなかったのである。彼には現実から逃避し、過去に救いを求める願望すら見出される。一八九四年六月二十四日にベルツに宛てた手紙のなかでギッシングは、「私が時代の動きにほとんど真剣な興味を抱いていないというのは、驚くべきことです。確かに、ある程度はそれについて学びはし

ます。しかし私が本当の喜びを得るのは、古代の事柄からなのです」(Letters 5: 212)と語っている。この思いは、晩年の彼が抱いたギリシヤやイタリアの古典古代世界への憧憬につながるものである。

ギッシングのそうした現実からの逃避願望が、ジェンダー間の争いのなかでも、例えば、ハーヴェイの作品結末での態度に反映されるわけである。ただ、女性問題に関するギッシングの態度には、他の問題の場合と違って、単に諦観の念ですまされない激しさがある。彼が、自分と同じ弱者の立場に置かれた女性に共感を覚えているのは確かだ。対等な夫婦関係を築くのに失敗するアルマや『女王即位五十年祭の年に』の女性主人公ナインシーを描き出したからといって、何もギッシングが女嫌いだということに直結するわけではない。むしろ、当時の社会で女性の置かれた状況を忠実に再現していると言った方が適切であるろう。だが、彼の保守的態度が作品中に映し出されているのも事実である。彼は、自分が女性への共感者だと見られるのに驚きを隠さず、「女性たちからの同情と助言を求める手紙をこれほど多く受け取るとは、奇妙なことである。私の作品のなかに、女性の心を惹きつける何があるのか、まったく理解できない」(Letters 5: 351)と語る。実際、彼は女性を感情的な生き物と見なしているのかのごとくに、シヨールペンハウアーの影響の下、執拗なまでに、男性を巡る女性の女性に対する嫉妬心を描き出しさえする。『余計者の女たち』ではエヴァアードを巡るローダ

のモニカへの、また、同じくエヴァアードを巡るメアリのローダへの嫉妬心が、『渦』ではレッドグレイヴを巡るアルマのシビルへの、また、ハーヴェイを巡るアルマのメアリ・アボットへの嫉妬心が克明に綴られたり、示唆される。ギッシングがガブリエルに宛てた初期の手紙からも、たとえ愛情がこもったものにせよ、「あらゆる点で同等」であるはずの女性に対する保護者然とした態度が読み取れる。二十九歳の彼女に向かって、「かわいい、かわいい、お嬢ちゃん」、「無垢で、明るい小さな顔の、わたしのかわいい人」、「愛しい小さな女の子」といったように、慣習的な愛称で呼びかける。だが、それは裏を返せば、自らの置かれた立場の不安定さを必死で覆い隠そうとする姿勢だとも解釈できよう。実際、後に彼女に宛てた手紙では、彼ら病について触れられており、強く我々の憐れを誘う。病ゆえに男性としての主導権を握ることができない己自身を、男性として不適切者と見なす感情が表面化するのである。

過去二年間を振り返ってみると、かなり弱った私自身の姿が浮かんでくる。反抗して「だめだ、これは男の人生じゃない!」と言う勇氣もなく、不満げに従っていたに過ぎない。これからは、妻の目から見てもっと尊敬に値する男になるつもりだから。結局のところ、旧来どおり男が支配するのが、まったくもって健全であり、正しいことなんだ。ただ、そのためには、男は男らしく、支配者として相応しくなければならない。最も軽

蔑すべき男というのは、たとえ最愛の女性であっても、女性におとなしく従うような輩だ。(Letters 8: 189)

ガブリエルがミセス・ウエルズに「かわいいそうな、気の弱いジョージ」(Letters 8: 225) について憐れみ交じりの不平を言っていることは、ギッシングが男性としての役割を果たすのに失敗したことの証左となる。そして、これらの手紙からは、ギッシング自身が、ヴィクトリア朝の男性神話の犠牲者だったことが分かるのである。

その神話に本質的に忠実た然とするギッシングの姿勢が、女性との関係において、結局は浅薄な態度しか示せない男性主人公たちを生み出しているのである。『女王即位五十年祭の年に』のライオネルにしてもそうだ。彼は、進歩的な精神の持ち主を装いつつ、性の二重基準を自分自身に適用する。『因襲にとられない人々』で触れられ『女王即位五十年祭の年に』で展開される「ゴドウィン結婚」は、ライオネルには理想とも言える独身生活をもたらすのに対して、妻ナンシーには、独立どころか、夫への愛と息子への母性に縛られた単調な監獄生活を強いることになる。ライオネルは自己の啓発につながるような正確な自己分析をせず、卑劣で臆病な人生を送り続ける、単に誇り高い神経質な気取り屋に過ぎない。結果として彼は、家長としての責務を放棄し、その権威を貶める。そうしたライオネル像を通して、我々はナンシーに対するギッシングの憐憫

の情を読み取る。だが同時に、ライオネルの自己正當化からは、ギッシングの、自己主張する女性を服従せんとする強い欲求と、それとは正反対の解放願望を見て取ることができるのだ。そこに、アーサー・ピーチーの不幸な結婚生活の場合と同様、ギッシングのイーデイスに対する憎しみを重ね合わせることは容易であろう (Halperin 198:207)。要するにギッシングは、理性ではライオネルを批判しつつも、彼の生き方に心底では強い共感と羨望を寄せるのである。ギュスターヴ・ルボンが「過去の思考は、揺るがされてはいるけれども依然として強力であり、それらに取って代わるべき新しい思考は、いまだ形成途上である。現代は過渡期であり、無秩序が支配する時代なのだ」と表現する世紀末にあつて、ギッシングの女性観は、変化を意識する男性が多かれ少なかれ内に秘める、戸惑いとそれを打ち消さんごための時の流れへの抗いを、浮き彫りにするのである。

註

- (一) Bram Dijkstra, *Idols of Perversity: Fantasies of Feminine Evil in Fin-de-Siècle Culture* (New York: Oxford UP, 1986) 399.
 (二) Quoted in Ronald Pearsall, *The Worm in the Bud: The World of Victorian Sexuality* (1969; Harmondsworth: Penguin, 1972) 106.
 (三) George Whyte-Melville, "Strong-Minded Women," *Fraser's Magazine* 68 (November 1863): 675.
 (四) Susan Kingsley Kent, *Sex and Suffrage in Britain, 1860-1914* (Princeton, NJ: Princeton UP, 1987) 66.

- (5) John Ruskin, *Sesame and Lilies* (1865; London: George and Allen, 1905) 121.
- (6) Mrs. A. A. Brown, "The Proper Sphere of Men," *Pittman's Monthly Magazine* 4 (1854): 307.
- (7) Gissing's "Scrapbook," the Porzheimer Collection, New York Public Library, qtd. in David Grylls, "A Neglected Resource in Gissing Scholarship: The Porzheimer MS 'Scrapbook,'" *Gissing Journal* 27.1 (1991): 10.
- (8) Elaine Showalter, *Sexual Anarchy: Gender and Culture at the Fin de Siècle* (1991; London: Virago, 1992) 30.
- (9) Martha M. Johnson Himber, "George Gissing's Females: Fictional Women, Factual Wives," diss. U of Missouri, Columbia, 1991, 184.
- (10) Judith R. Walkowitz, *City of Dreadful Delight: Narratives of Sexual Danger in Late-Victorian London* (London: Virago, 1992) 24.
- (11) Patricia Stubbs, *Women and Fiction: Feminism and the Novel 1880-1920* (Brighton: Harvester, 1979) 144.
- (12) アルトゥル・シヨーンンハウアー『シヨールペンハウアー全集 十四』(秋山英夫訳、白水社、一九七三)二五八頁。
- (13) 男性中心社会においては、母親の娘への愛情には、将来娘が被るであろう苦難ゆえの憐れみの情が混じっている。ナンシー・チヨドロウは、母親が自らの「拡張もしくはダブルとして娘」を体験し、通常娘を自分自身と同一視すると述べている。Nancy Chodorow, *The Reproduction of Mothering: Psychoanalysis and the Sociology of Gender* (Berkeley: U of California P, 1978) 109.
- (14) ハーヴェイとヒューイの父子関係も、アルマと赤ん坊との母娘関係との対比のなかで、きわめて重要である。シモン・グッドは「父子関係のおかげで「ロルフは、結婚やその緊張関係がもたらすものに直面するのを避ける」ことが可能」(Goode 188) と述べている。⁵²
- (15) Morley Roberts, *The Private Life of Henry Maitland: A Portrait of George Gissing* (1912; Whitefish, MT: Kessinger, 2004) 109.
- (16) Quoted in Christophe Prochasson, *Les années électriques, 1880-1910* (Paris: La Découverte, 1991) 7.